

---

# 四季～君との思い出～

水姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四季〜君との思い出〜

### 【Nコード】

N6283B

### 【作者名】

水姫

### 【あらすじ】

春は出逢い。夏は煌めき。秋は別れ。冬は希望。僕と私がすごした日々。

## 春風

花吹雪が、舞った。

『春風』

ひらり

花びらが一枚、こぼれた。

また一枚、また一枚と、風が吹いては散ってゆく。

寄りかかっている桜の木からは、心なしか、温かい鼓動が伝わってくる。なんとなく気になって、木に腕をまわし、耳を当ててみた。

トクトクと心音が聞こえた気がしたけれど、それは自分のものだった。

「何してるの？」

声がする方を見ると、不自然な距離に君が立っている。

座っている私とは違い、立ちながら木に寄りかかる君。

（隣にあればいいのに）

気恥ずかしくて、言わなかったけど。

「桜、温かいから。」

「そう?。」

「うん。」

上からふってくる質問に、私は淡々と答える。

距離感が、もどかしい。

（友達……じゃ、ないよね。ふたりきりだし。）

ひらり

（でも、付き合ってたなんて言われてない。）

ひらり

（……付き合おうとも、言っていないけど。）

風が吹いて、花びらが飛び、地面に落ちる。繰り返して、繰り返して、無意味な輪廻。

穏やかな陽射しに、目を閉じた。あたたかな西風が、頬を撫でる。

サラサラ

ああ、そんな音色が、聞こえてきそう。

ふと近くに気配を感じて、私は瞳を伏せたまま、手探りに手で地面を這った。コツン、と私の指と君の指先が触れる。

それに少なからず驚いて、瞳を開ければすぐ目の前に君の顔。

更に驚いて、目を見開く。

君は、柄にもなく真剣な顔して、目がそらせなかった。

君の手が、私の頬に。自然と距離が縮んでいく。

ユラユラ

花びらが揺れて

（付き合ってなんて言われてないけど）

ザァッと強風が吹く。

（…付き合おうとも、言っていないけど。）

桜吹雪、ふたりを包んで、ふたつの影が重なった

春風（後書き）

春風が

吹いて舞うのは

花吹雪

初めて交した

キスの余韻

## 夏色

ラムネが、はじけた

『夏色』

久しぶりに、爽やかな晴天。カラッとした陽気に、涼風。

それでも、夏の暑さは今だ健在。ジリジリとした日差しが、焼けた肌に突き刺さる。

カラン、カラン

沈黙に響く軽快な音楽。

「……なにやってるの？」

「ラムネのビー玉」

「迷語も言ったら？」

「言わなくても、分かるでしょ？」

もちろん。というか、君の行動を見れば、きっと誰だって分かるだ

ろっ。

機嫌悪くなるから、言葉にはしないけど……。

「ビー玉、取りたいの？」

「分かってるじゃん」

カラン、カラン

「無理じゃない？」

「無理じゃない」

カラン、カラン

止まらない音は、夏という存在を一層感じさせた。

しばらくすると、さっきまで横にいた太陽が、僕の前にまわってきた。自然と目が合う。

（暑……）

日差しが眩しく、目を細めた。

最初は、太陽と見つめ合ってたけど、だんだんそれに耐えられず、帽子を深くかぶった。

隣を見れば、君はラムネビンに苦戦中。



（暑くないのかな…）

よく見ると、君の額には、うっすらと汗が滲んでいた。こめかみも、首筋にも。

ビー玉に夢中で気付いてないのか、気付いててなお、ビー玉を優先してるのか……。

（負けず嫌い）

心の中で、そつと囁く。

僕は帽子をはずした。すると、一気に解放感が広がる。風に吹かれて、涼しさは増すが、代償とばかりに真夏の太陽が、僕の頭を攻撃する。

はあっ、と軽く息を吐き、隣を見る。よくまあ、飽きずに苦戦中。それでもやっぱり暑そうで。

「あっ」

僕が君の頭に帽子を乗せると、君が声をこぼしたのは、ほぼ同時だった。

ビー玉は飛び、ビンの中に残っていた液体が、ふたりの体を盛大に濡らした。

夏色（後書き）

好きだよと  
囁きあつた  
あの夏は  
今では思い出  
ラムネの泡

## 秋雨

雫が、こぼれた。

## 『秋雨』

ポツリ

地面にできる、斑点。

時がすぎる度、それは増えていく。

肌に、触れた。

（冷たい…）

ざわついた駅が、冷気に包まれていく。ガタン、ガタンと、電車が  
せまって、止まる。

降り始めた雨に、せわしく走ってゆく人々。人が乗って、降りて、  
空席の多い電車は、どこか悲しげ。

「どのくらいかかるっけ？」

「早くて一年、長くて三年。」

「そっか…」

終わった会話。続く沈黙。ふたりの体は、びしょぬれだった。

あまりに気まずくて、思わず出した言葉は、残酷な本音。

「夏休みとか、正月は…」

「状況によるかな。できるだけ帰ってきたいけど。」

「……そう。」

投げ掛けた質問が残酷なら、答えはもっと酷いものだ。

再び、ふたりして黙りっぱなし。目も合わせない。

「」  
「」

重い沈黙を破るかの様な、アナウンスが流れる。  
ふたりの時間は、残り僅か。

「そろそろだね。」

「うん……。」

気のない相槌。

（私はどうなるの？）

（もう会えないの？）

（これで終わり？）

……言えるわけない。

うつむいた私に、君は何も言わない。雨は霧雨となり、目の前が霞む。

発車のベルが鳴り響く。

「もう、乗らなきゃ」

君の腕を力の限り引つ張り、言いかけた言葉を遮らせた。

自分の唇を、君のと重ねた。

「愛してるから。」

私が、今一番伝えたい言葉

君はフツと、微笑んで、私の腕を優しくほどいた。冷たい雨は、やむ事を知らない。

君は大きな一歩を踏み出し、電車へと乗る。

そして、最後、ドア越しに聞こえた君の『サヨナラ』の声。

ガタン、ガタンと、去ってゆく電車を、追い掛けもせず、いつまでも見つめていた。

雨は嘆いて、空は泣く

秋雨（後書き）

去りゆく背

見つめて濡れる

私の頬

伝っているのは

本当に雨？

## 冬空

芽が、光ってた。

## 『冬芽』

ハラハラと舞う粉雪。

触れては溶けて、自分と雪の体温の違いが、よく分かる。

息を吐く度、フワッ、と白い靄が広がった。

空気は相変わらず冷めざめしていて、身震いする。

抱き締める温もりは腕の中になく、手を伸ばしても、届かない距離。

見上げれば曇り空。ただ無情に雪が降り、額を、頬を、瞼を、僕の全てを冷やしていく。

しばらくそれに浸っていたが、クシャミひとつで現実へと戻された。

ドラマの1シーンになっていたんだろう構図が、いとも簡単に崩れる。

(せっかく絵になっていたのに…。って僕自己陶醉者？恥ずっ)



話しかける人も居ないから、一人ノリツッコミ。

…哀れかもしれない。

ハァー、と盛大なため息をつく、と、比例したかの様にあらわれる白い霧。

君と離れてから、まだ二ヶ月程度。

最後に言った、『サヨナラ』の言葉は、君に届いた？

なんであんな伝え方したのか、自分でも分からない。あんな、ごまかす様な…。

（未練なのかな？）

はつきり別れば良かった？それとも、待ってて、とでも言えば良かったの？

今でも僕は、考える。

お互いが幸せになるには、何が一番最善だったのだろう。

あれから君の声を聞いてない。  
姿も見えてない。触れてもない。

でも、僕の中に君の存在は確かにあつて。  
それが、とてつもなく切ないんだ。

じわり

僕についていた雪が、溶ける。少しずつ、降る雪の量が減っていく。わずかに雲の隙間から、陽の光がさした。

(…綺麗)

男は現実主義者、なんて言われるけど、それは逆だと思う。本当は、ずっとロマンチストだ。

だって僕は、運命なんか信じてるから。

君は、今どうしてる？突き放した僕を、まだ想ってくれてる？

それとも、もう僕の事は、過去になっている？

肯定とも、否定とも取れる別れをして、君はどっちを選んだんだろう。

はらり、はらり

もう最後まででもいう様な、夢い降り方。舞う純白は、僕の肌を優しく撫でる。

太陽はほとんど顔を出して、積もった雪は、それに反射してキラキラと光っていた。

ふと、足もとを見ると、白銀の中に小さな緑を見つけた。

なんとなく気になって、近付いてみると、それはまだ幼い芽だった。

(… 寒くないのかな)

そんなロマンチックな事を思う。

雪に埋もれた芽。一体どんな花を咲かすのだろう。

僕等が今も想い合ってるなんて、それは僕の

エゴ

我儘

希望

願い

それでも信じる僕は、愚か？

家に帰ったら、真っ先に電話するよ。

気恥ずかしいけど、手紙も書きたい。

そして、春になったら、君に会いに行こう。

愚かな僕の、淡い期待。

叶わなかったら、後悔と一緒に涙を流そう。

でも、もし、期待通りになったら、そのときは君を、痛いくらい抱

き締める。

雪が溶けたら、それは春の訪れの合図。

冬空（後書き）

とける雪

キラリと光った

緑の芽

遠くの君が

恋しくなった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6283b/>

---

四季～君との思い出～

2010年10月20日19時18分発行